

## 国際鼻科学会（Extraordinary Meeting of Internatinal Rhinologic Society, Kyoto）

会長 高須 照男

担当 名古屋市立大学医学部耳鼻咽喉科学教室

会期 1965年（昭和40年）10月19日～20日

会場 京都国際ホテル

American Rhinologic Society の総帥 Prof. M. H. Cottle およびその事務局長を務める Dr. G. H. Drumheller から、第8回国際耳鼻咽喉科学会議が東京で開催されるのを機に、京都で国際鼻科学会（International Rhinologic Society）を開催して欲しいとの要請があったのは、1965年の初め頃だったのだろうか。当時は、鼻副鼻腔学会が研究会から発展、改組されてまだ間がなかった頃だったが、その運営委員会では、これを引き受けるべきかどうか、大いに議論されたと聞いています。というのは、この国際鼻科学会の性格がはっきりしておらず、どうやら Prof. Cottle の率いるアメリカ鼻科学会（ARS）と Prof. Van Dishoeck（オランダ・ライデン大学）率いるヨーロッパ鼻科学会（ERS）とが、共催のようなかたちで、Rhinoplastyを中心とする講習会を開催しているのを、国際鼻科学会と称しているのではないかという疑問があったからであろう。とはいいうものの、当時、急速に進み始めた耳鼻咽喉科各分野の国際化に、鼻科学も遅れてはならないという意味もあって、やはり、この際、日本で引き受けたことにした方がよいとの意見が多かったようである。ただし、日本鼻副鼻腔学会としては協力はするが、直接参画するという姿勢は知らないことが確認されていた。そんな経緯があったが、結局は、その年の日本鼻副鼻腔学会の年次会長であった高須照男教授がお世話役をつとめることになったので、学会運営は当然、私たち名古屋市立大学医学部耳鼻咽喉科学教室が受け持つことになったのだった。開催決定から学会まで、たったの5ヶ月足らず—昭和40年5月からその準備をスタートさせ、国内外への会告、演題募集など当時医局長だった私にはめまぐるしい毎日が回転しはじめた。開催地が京都ということになったので、当時、京大の助教授をつとめておられた武田一雄現大阪医大教授をはじめ、太田文彦現近畿大教授など京大耳鼻咽喉科学教室の先生方のご助言をいただいて、会場を京都国際ホテル地下のレインボーサロンに設定し、会期は東京の国際耳鼻咽喉科学会議の前の、1965年10月19日・20日両日と決めた。講習会形式のものも同時に開いてほしいとの再三 Dr. Drumheller から申し入れがあったが、それを退け、公募された一般演題中心の学会を開催することになったものの、果たしてどの程度の演題が集まるか心配であった。しかし、蓋をあけてみると、28題（うち16題は日本よりの出題）の応募があり、これに Prof. Cottle, Prof. Van Dishoeck の講演、Dr. Drumheller の Rhinoplasty に関するビデオ（2時間）が加わり、プログラムの内容もかなり充実したものになった。この学会への登録、出席者を増やそうと、羽田空港まで出向き、団体旅行者としてアメリカなどから入国してくる耳鼻科医たちに京都・国際鼻科学会のPR

をした記憶も今となっては懐かしい。そのお陰か、いよいよ開幕した国際鼻科学会には日本をはじめ、アメリカ、イギリス、オランダ、ベルギー、フランス、西ドイツ、フィンランド、カナダ、ブラジル、エクアドル、ベネズエラ、オーストラリア、香港、台湾、フィリピン、インド、トルコ、イラン、アラブ連合共和国の計 20 カ国から約 200 名の参加者を得た。19 日の午前中には business meeting があり、約 3 時間にわたり国際鼻科学会への日本の正式参加をつよく要請されたが、日本鼻副鼻腔学会としてこれに直接参画をすることは時期尚早であり、しばらくは個人的な立場からの参加にとどめるという結論になったのだった。この状態はその後もずっと続くことになったのだったが、最近ようやく、講習会が主という姿を改め、学術講演会を主とした真の意味の国際学会に脱皮する趨勢になつたので、日本鼻副鼻腔学会もそれに呼応してその運営に積極的に関与してゆくことになった。京都での国際鼻科学会から今年で丁度 17 年を経たが、あの学会をお世話したものの一人として、流れた歳月の重さをふと感じるこの頃である。これも最近あらためて知ったのだったが、当時すでに一定の歴史をもつた学会と思っていた国際鼻科学会はこの京都開催の時を学会の創設時点としていることにはいささか驚いた次第であった。あの時の私たちの苦労が今後の国際鼻科学会発展への一つの敷石になっているとすれば、大いに報われるわけであるが。

#### 注釈

本原稿は、昭和 57 年 9 月に発刊された日本鼻副鼻腔学会会誌 vol. 20 No. 2 学会 20 年の歩み 64~65 頁に掲載されていいる国際鼻科学会に関する記事であり、馬場駿吉教授（名古屋市立大学医学部耳鼻咽喉科学教室）が書かれたものである。